

若者のアルコール摂取教育に関する一考察

— 高校生・大学生を対象としたアンケート調査をもとに —

A Study on Education of Alcohol Intake for Young People :
— Based on a Questionnaire to High School Students and University Students —

長島 和子・荒波 早苗¹

Kazuko NAGASHIMA Sanae ARANAMI

はじめに

お酒は古来「百薬の長」の異称があり、世の中が豊かになるにつれ、その消費量が増大してきている。最近の若者は、酒を生活のアクセントや会話のアクセサリとして楽しむ傾向があり、中高年のヘビードリンカーとは一線を画しているものの、無知により死に至る事故も発生している。わが国では、未成年者の飲酒は法律により禁止されているにもかかわらず、実際には大人は未成年者の飲酒に対して非常に寛容であるという社会状況があり、アルコール摂取に関して十分な教育が行われているとはいえないのが実情である。

本研究では、若者のアルコール摂取の実態を明らかにし、これからのアルコールに関する教育のあり方を考察しようとするものである。

1. 方 法

若者のアルコール摂取の実態を明らかにするために、高校生・大学生を対象に、次のようなアンケート調査を行った。

(1) 調査対象

調査対象者は、調査協力の得られた首都圏の公立高校3校の高校生236名、および大学生120名、合計356名であり、男子197名、女子159名、未成年者295名、成人61名であった。性別・学年別調査対象者数は、表1に示すとおりである。

表1. 性別・学年別調査対象者数

	名						
	高校1年	高校2年	高校3年	大学1年	大学2年	大学3年	合計
男子	40	38	33	53	31	2	197
女子	37	48	40	15	17	2	159
合計	77	86	73	68	48	4	356

(2) 調査方法および調査時期

高校生に対しては、各学校の家庭科教師に依頼し、その監督のもとで授業中に配布して記入させその場で回収した。また、大学生に対しては、未成年者が多いと考えられる普遍教育（いわゆる一般教養）の語学の時間の一部を借用して、担当教員に依頼あるいは調査者の監督のもとで記入させ、同様にその場で回収した。調査時期は、1996年10月下旬から11月上旬である。

(3) 調査内容

調査内容は、対象者の属性、飲酒経験、現在の飲酒状況、アルコールへの関心や態度で、以下のような項目で

1 ふたば愛児会いちょう保育園

構成した。

- ①対象者の属性：学年・年齢・性別・部活動の有無および種類・アルバイトの有無と頻度およびその種類・居住形態・体型
- ②飲酒経験：経験の有無・初飲の時期・お酒の種類・動機および機会・印象
- ③現在の飲酒状況：飲酒の有無・頻度・場所・誰と・最もよく飲むものおよび好きなもの・飲酒の理由・具合の悪くなった経験、怪我をした経験の有無・イッキ飲みの有無およびその好き嫌い・イッキ飲みをする理由
- ④アルコールへの関心や態度：お酒の好き嫌い・両親の飲酒・自己のお酒に対するタイプ・保護者および教師の態度・学習の有無およびその教科・未成年者飲酒に対する意識、知識の有無・身体に及ぼす影響への関心の有無

(4) 集計・分析方法

アンケートの集計・分析は、SPSS Windows'95統計パッケージを使用して、データの集計および X^2 検定による分析を行った。

2. 結 果

(1) 若者の飲酒経験

全体では94.4%の338名に飲酒経験があり、未成年対象者では295名中93.9%にあたる277名に飲酒経験があった。そのうち、高校生は219名で、飲酒経験のない高校生は17名であった。初飲時期は、早いものは就学前で30名(8.9%)、小学校低学年85名(25.1%)、小学校高学年59名(17.5%)、中学校92名(27.2%)、高校62名(18.3%)、大学8名(2.4%)、無回答2名(0.6%)であった。これらの調査から、小学校卒業までに51.5%、中学校卒業までに78.7%、高校卒業までに97.0%のものが飲酒経験を有していたことが明らかになった。初めて飲んだお酒の種類はビールが最も多く42.9%、ついでおとそ16.9%、日本酒8.9%、カクテル5.9%、ワイン・シャンパン・サワー等が各々5%台であった。

初飲のきっかけとしての「機会」は、お正月27.6%、友人とのつきあい12.2%、晩酌のつきあい9.5%、クリスマス6.5%、クラスで打ち上げ5.0%、誕生日などのお祝い4.5%、部活で打ち上げ2.7%、家族旅行1.2%、アルバイトの飲み会・修学旅行がともに0.6%、覚えていない17.2%、その他12.5%であった。その他では、「結婚式」「法事」「こどもの日」「普段の食事」という具体的記述がみられた。また、初飲の「動機」は、家族が勧めたから40.2%、好奇心から27.0%、友人が勧めたから7.2%、先輩が勧めたから3.0%、ストレスから0.3%、覚えていない16.5%、その他5.7%であった。反抗心からという選択肢を回答したものはなかった。その他の具体的記述には、「間違えて飲んだ」「行事だから」「皆飲んでいたら」「儀式だから」「お正月だから」等がみられた。

初飲の印象については、まずかった46.0%、美味しかった18.7%、どちらでもない16.6%、覚えていない16.3%、その他2.4%であった。その他では、「ポーッとよい気分になった」「熱くなった」「苦かった」等の回答がみられた。

また、飲酒経験と属性との関連では、男子より女子の方が「飲酒経験がある」傾向があり($p < 0.05$)、「太っている」「太りぎみ」と回答したものが初飲時期が早く($p < 0.01$)、学年・年齢が低くなるほど初飲時期が早くなる傾向がみられた($p < 0.001$)。

(2) 現在の飲酒状況

飲酒経験のある338名のうち74.6%の252名が現在お酒を飲んでいると回答し、そのうち未成年者は78.6%の198名、高校生は56.7%の143名であった。調査対象者全体に対する飲酒者の割合は、高校生では60.6%、大学生では90.8%であり、飲酒経験とは異なり高校生と大学生の間に差が認められた。しかし、高校生の約6割が飲酒していることが明らかになった。

飲酒の頻度は、高校生・大学生ともに「月に1~2回」という回答が最も多く、大学生で「週数回」「ほぼ毎日」

がそれぞれ8.2%，0%であったのに対し，高校生では14.1%，6.3%と大学生よりも高い値を示した。飲酒の場所は居酒屋が最も多く39.8%で，ついで自宅29.5%，友人宅19.3%であった。誰と飲酒をするかでは，友人が66.4%，家族15.4%，先輩・後輩9.1%，一人で7.5%，その他1.6%であった。

次に現在飲酒をしている対象者の「最もよく飲むお酒」と「最も好きなお酒」の種類は，図1に示すように必ずしも一致せず，最もよく飲むお酒はビールであり，最も好きなお酒はカクテルであることが分かった。飲酒する理由について複数回答を求めた結果は，図2の通りである。最も回答の多かったものは「美味しいから」であり，ついで「雰囲気が好きだから」「飲み会があるから」「盛り上がるから」「親交が深まるから」などの理由が上位を占めていた。飲酒後の各種体験については，「具合が悪くなったこと」のあるものが約半数の128名あり，「記憶がなくなったこと」も70名（28.0%）のものが体験していた。また，「怪我をしたこと」「交通事故に遭ったこと」「交通事故を起こしたこと」は，それぞれ24名（9.6%），2名（0.008%），3名（0.012%）が「ある」と回答した。

イッキ飲みについては，現在飲酒をしているものの65.1%が経験をしており，高校生は「経験あり」が「経験なし」をわずかに上回っていた（表2）。経験者のうち，イッキ飲みが好きなものは22名（13.3%）で，嫌いなものは69名（41.8%），どちらでもないものが74名（44.8%）であった。複数回答によるイッキ飲みをする理由では，「盛り上がるから」が最も多く，ついで「友人が勧めるから」「先輩が勧めるから」であった。

飲酒の有無と属性との関連では，学年・年齢が高くなるにつれて飲酒をしているものの割合が有意に高くなり，部活・サークルに所属しているものの方が所属していないものより，また，アルバイトをしているものの方がしていないものより，一人暮らしのものの方が家族と同居しているものより，飲酒をしている割合が有意に高い傾向が認められた。飲酒をしているものの飲酒頻度と属性との関連では，大学生よりも高校生に（ $p < 0.001$ ），家族と同居しているものより一人暮らしのものに（ $p < 0.001$ ）飲酒頻度の高い傾向が認められた。イッキ飲み経験の有無と属性との関連では，学年・年齢・居住形態との関連が認められた（ $p < 0.001$ ）。学年・年齢が高くなるにつれイッキ飲みをしたことがあるものが多くなり，家族と同居のものより一人暮らしのものにイッキ飲みの経験が多い傾向が認められた。また，クラブ活動との関連では，部活・サークルいずれの場合でも文化系より運動系に（ $p < 0.01$ ），性別では，女子より男子に（ $p < 0.05$ ）イッキ飲み経験者が多い傾向が認められた。

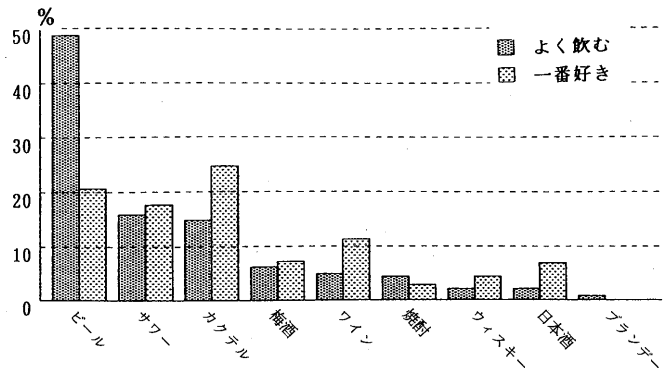


図1. よく飲むお酒と一番好きなお酒

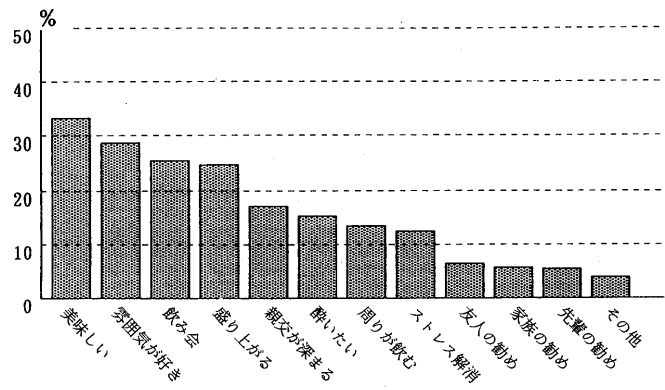


図2. 飲酒する理由

表2. イッキ飲み経験の有無

	経験あり	経験なし	合計
高校生	75(52.4)	68(47.6)	143(100.0)
大学生	89(81.7)	20(18.3)	109(100.0)
未成年者	115(58.1)	83(41.9)	198(100.0)
成人	49(90.7)	5(9.3)	54(100.0)
全体	164(65.1)	88(41.9)	252(100.0)

(3) アルコールへの関心および態度

1) お酒の好き嫌い・両親の飲酒・自己のお酒に対するタイプ

対象者全体のお酒の好き嫌いの結果については、「好き」39.7%、「嫌い」13.9%、「どちらでもない」35.1%、「わからない」11.3%であった。また、両親の飲酒については、「両親とも飲む」43.9%、「父親のみ飲む」32.8%、「母親のみ飲む」5.1%、「両親とも飲まない」13.3%であった。自己のお酒に対するタイプについては、「お酒に対して強いタイプ」22.0%、「お酒に対して弱いタイプ」34.2%、「わからない」43.8%であった。お酒の好き嫌いと属性との関連では、学年・アルバイトの有無・居住形態とわずかに関連が認められたが ($p < 0.05$)、年齢との関連は認められなかった。お酒の好きなものの割合は、学年が高くなるにつれ多くなり、アルバイトをしているもの・一人暮らしのものに多いという傾向が認められた。

2) 飲酒に対する保護者・教師の態度

対象者の目からみた対象者の飲酒に対する保護者および教師の態度について、最も近い選択肢の回答を求めた結果は、図3に示すとおりである。保護者の態度としては、「絶対に飲ませない」は全体で7.1%であり、「本人次第」「仕方がない」と考えている保護者は約45%で、飲酒を良いと認めているものを合わせると90%以上の保護者が子どもの飲酒に対して特に何も言わないということが明らかになった。とくに高校生では、「絶対に飲ませない」は9.8%、「本人次第」「仕方がない」は合わせて35%であり、「少しだけなら良い」「大人と同様に良い」を合わせると77.3%の保護者が、未成年者である高校生の飲酒を容認していた。教師の態度については、全体では「わからない」と回答したものが多かったが、「絶対に飲ませない」は18.6%であり、「本人次第」が26.6%で、「仕方がない」6.8%、「少しだけなら良い」19.5%であった。高校生の場合は、「絶対に飲ませない」は27.4%で「分からない」について多かったが、「本人次第」「仕方がない」は合わせて19.6%、「少しだけなら良い」が22.6%であり、教師は生徒の飲酒に対してかなり肯定的であると生徒からみられていることが明らかになった。大学生の場合は、保護者・教師ともに「本人次第」が最も多くそれぞれ61.3%・47.9%であり、たとえ成人に達していなくても飲酒に関しては本人の責任であるとする大人の態度が伺えた。

対象者からみた保護者および教師の飲酒に対する態度と対象者の飲酒との関連を X^2 検定で分析した結果では、対象者の飲酒経験の有無と保護者の態度 ($p < 0.001$)、教師の態度 ($p < 0.05$) との間に有意に関連が認められた。飲酒に対して規制されないものほど飲酒経験があり、「絶対に飲ませない」と回答したもののほど飲酒経験がない傾向が認められた。また、対象者の現在の飲酒の有無と保護者・教師の飲酒に対する態度との間にも、飲酒経験と同様に有意に関連が認められた ($p < 0.001$)。「飲酒頻度」「イッキ飲み」「お酒の好き嫌い」と「保護者の飲酒に対する態度」との間でも有意な関連が認められたが ($p < 0.001$)、これらの項目と「教師の飲酒に対する態度」との間には関連は認められなかった。

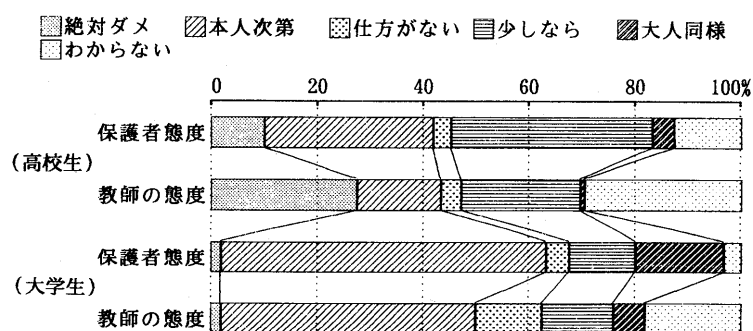


図3. 対象者の飲酒に対する保護者・教師の態度

3) アルコールについての学習経験

学校の授業での「アルコールの身体に及ぼす影響」に関する学習経験については、「ある」ものが69.5%、「ない」ものが13.3%で、「覚えていない」ものが17.2%であった。学習をした授業科目は「保健体育」が85.3%で、「道徳・学活」「家庭科」「生物・化学」などはいずれも数%であった。アルコールに関する学習経験の有無と現在の飲

酒の有無との間に有意の関連が認められ ($p < 0.001$), 学習経験のあるものほど現在飲酒をしていないものが多い傾向がみられた。また, アルコールの学習経験とイッキ飲みの経験との間にも有意な関連が認められ ($p < 0.05$), イッキ飲みの経験のないものの80%弱に学習経験があり, 学習経験のないものの80%強にイッキ飲みの経験があった。

4) 未成年者の飲酒に対する意識

未成年者の飲酒に対する意識については, 表3に示すように当事者であるかどうかで若干違いは認められるが, 全体では「いけないと思う」23.2%, 「良いと思う」27.8%, 「分からない」37.1%, 「その他」11.9%であった。「その他」は, ほとんどが「少しなら良い」「限度をわきまえていれば良い」「個人の自由」など, 未成年者の飲酒に対して肯定的であった。未成年者の飲酒に対する意識と属性・アルコールに関する学習経験との間には有意な関連は認められなかったが, 飲酒経験の有無 ($p < 0.05$), 現在の飲酒の有無 ($p < 0.001$) との間には関連が認められた。「いけないと思う」ものは飲酒経験がなく, 現在も飲酒せず, 「良いと思う」ものは飲酒経験があり, 現在飲酒している傾向が認められた。また, 未成年者の飲酒に対する意識と「イッキ飲みの好き嫌い」($p < 0.05$), 「お酒の好き嫌い」($p < 0.001$), 「自己のお酒に対するタイプ」($p < 0.01$) との間にも関連が認められ, 未成年者の飲酒を「いけないと思う」ものはイッキ飲みやお酒の嫌いなものが多く, 「良いと思う」ものはこれらを好む傾向がみられた。「お酒に強いタイプ」のものは未成年者飲酒を「良いと思う」傾向があり, 「お酒に弱いタイプ」「分からない」ものは, 未成年者の飲酒をいけないか良いか「よく分からない」とする傾向がみられた。

表3. 未成年者飲酒に対する意識

	いけないと思う	良いと思う	分からない	その他	合計
高校生	56(23.9)	72(30.8)	86(36.8)	20(8.5)	234(100.0) ¹
大学生	26(21.8)	26(21.8)	45(37.8)	22(18.5)	119(100.0) ²
未成年者	69(23.5)	87(29.8)	106(36.2)	31(10.6)	293(100.0) ¹
成人	13(21.7)	11(18.3)	25(41.7)	11(18.3)	60(100.0) ²
全体	82(23.2)	98(27.8)	131(37.1)	42(11.9)	353(100.0)

無回答者: ¹2名 ²1名

5) アルコールに関する知識・関心の有無

「アルコールについての諸知識があるほうだと思うか」「アルコールの身体に及ぼす影響について関心があるか」について, 4段階で回答を求めた結果は表4に示したとおりである。知識があると思うものは全体の36%であり, 知識がないと思うものは64%で, 半数以上のものがアルコールに関する知識を持っていないと感じていることが分かった。また, アルコールの身体に及ぼす影響への関心は, 高校生よりも大学生に高かったが, 全体では関心があるものは67.3%, 関心がないものは32.7%であった。これらの結果から, 若者たちはアルコールの身体への影響について関心はあるが知識はないということが明らかになった。対象者のアルコールに関する知識と属性・飲酒状況等との関連では, 学年 ($p < 0.05$), 飲酒経験の有無 ($p < 0.001$), イッキ飲みの経験 ($p < 0.05$) との間に関連が認められた。学年が高くなるほど, 飲酒経験があるものほど自分で知識があると思うものの割合が高い傾向が認められ, 知識のないものにイッキ飲みの経験があるものが多い傾向が認められた。また, アルコールに対する知識とお酒の好き嫌い ($p < 0.01$), お酒に対するタイプ ($p < 0.01$) との間にも関連があり, お酒の嫌いなもの・お酒に強いタイプに「知識がある」ものが多い傾向が認められた。

また, アルコールの身体に及ぼす影響についての関心と属性との関連では, 学年 ($p < 0.01$), 年齢 ($p < 0.05$), クラブ所属の有無・種類 ($p < 0.05$), アルバイトの有無・頻度 ($p < 0.05$), 体型 ($p < 0.05$) との間に関連が認められた。学年・年齢が高くなるほど, クラブに所属しているものほど関心があるものも多く, クラブの種類は運動系より文化系にかつ部活よりサークルに所属するものに関心がある傾向がみられた。体型では, やせ傾向のものより太り気味のものに関心があるものが多い傾向が認められた。未成年者飲酒に対する意識との間にも有意に関連があり ($p < 0.001$), 関心があるものほど未成年者飲酒を「いけないと思う」ものも多く, 関心がないものほど「良いと思う」傾向が認められた。

表4. アルコールに関する知識および関心

					名 (%)
	大変ある	少しある	あまりない	全くない	合計
高校生	9(3.8)	58(24.7)	132(56.2)	36(15.3)	235(100.0) ¹
	45(19.3)	99(42.5)	71(30.5)	18(7.7)	233(100.0) ²
大学生	4(3.4)	56(47.5)	54(45.8)	4(3.4)	118(100.0) ³
	30(25.4)	62(52.6)	26(22.0)	0(0.0)	118(100.0) ³
全体	13(3.7)	114(32.3)	186(52.7)	40(11.3)	353(100.0)
	75(21.4)	161(45.9)	97(27.6)	18(5.1)	351(100.0)

無回答者: ¹1名 ²3名 ³2名 上段:知識 下段:関心

3. 考 察

(1) 初飲時期の低年齢化と学校におけるアルコール教育

高校生・大学生に対するアルコール摂取に関するアンケート調査の結果、対象者の95%が成人に達する前に飲酒を経験していることが分かった。また、対象者の半数以上が小学校卒業までに初飲経験があり、さらに初飲時期の低年齢化が進んでいることが明らかになったが、このことは、より早い時期からの家庭および学校におけるアルコールに関する教育が必要であることを示唆するものである。

そこで、現行のわが国における学習指導要領でアルコールに関してどのような扱い方がされているかを調べた結果は、以下のとおりであった。「保健体育」では、中学校の保健分野の第3学年ではじめて「疾病の予防」との関連で、喫煙、飲酒、薬物乱用と健康について指導することとなっており、それらの心身への急性の影響を中心に取り上げることとされている¹。それを受けた教科書では²、「成人病の原因と予防」「喫煙、飲酒、薬物乱用と健康」の項目で取り上げられており、さらに「飲酒と健康」と題してかなり詳細な内容が記述されている。また、生徒が理解しやすいように工夫された図や読み物としての「飲酒の功罪」も掲載されている。高等学校では³、「保健」の目標が、従前の集団の健康を高めることに寄与する能力と態度を育成することに重点をおいたものから、疾病構造や社会の変化に対応して個人の生活における健康・安全について理解を深めさせることになり、個人および集団の健康を高める能力と態度を育成することになった。内容については、従前の各項目が精選・再構成され、アルコールに関する内容は、「現代社会と健康」の中で個人の適切な生活行動との関連で取り扱うこととされた。それに伴い教科書でも⁴、「健康の考え方」の項で成人病予防との関連で過度の飲酒はいけないという内容の記述があり、「生活行動と健康」の項では、アルコールの体内変化や人体に及ぼす影響、大量飲酒や未成年者の飲酒および女性の飲酒の弊害についても詳細な記述が行われている。

家庭科関係では、現行の学習指導要領には小学校・中学校ともにアルコールに関する記述は一切なく、教科書でも全く触れられていない。高等学校の学習指導要領では、家庭科の必修科目「家庭一般」「生活技術」および「生活一般」のいずれにおいても、アルコールに関する内容を学習することについては明記されていなかったが、教科書では、「家庭一般」の「食物」の中で食品としてのアルコール飲料を取り上げており⁵、また、「青年期の健康」の項で、たばこや薬物とともに酒の健康への影響を強調している⁶。さらに、「保育」の「両親の健康と母性保護」の項では、過度の飲酒が早産・低体重の要因になるとし、妊娠中の女性は喫煙や過度の飲酒を控えるように注意を促した記述があった。前回の学習指導要領⁷にもとづく教科書では、食品としてのアルコールの記載はあるものの健康に関連した記載は一切みられなかった。

一方、米国の教科書“HEALTH”⁸には、小学校第3学年に相当する第3巻にアルコールについて4項目4頁分の記載があり、そのタイトルは“Effects of alcohol”, “Alcohol and driving”, “Alcohol and advertisements”, “Laws about alcohol”であった。この教科書は学年が高くなるにつれてアルコールに関する内容の記載が詳細になり、かつ項目・頁数が増加して最大では21項目・9頁にわたっての記述があり、繰り返しアルコールの人体に及ぼす影響やその危険性について述べられている。特にアルコール依存症についても詳細な記述があり、その社

会的影響などにも生徒が関心を持つように構成されている。

“HBJ HEALTH”では中学校2年生に相当する第8巻までにアルコールに関する学習内容がすべて網羅されているといえる。今回のアルコール摂取に関する実態調査で初飲時期が低年齢化してきていることが明らかになっており、わが国もより早い時期からのアルコールに関する教育が必要になっているのではなかろうか。

(2) 法律の順守と大人の対応について

現在の飲酒状況に関する調査結果は、初飲に関する問題以上に重要な問題を提起しているように考えられる。未成年者の約70%、高校生においては64%のものが現在も飲酒を継続しており、その飲酒場所は、居酒屋、自宅、友人宅、カラオケボックスなど、大人の目にふれる可能性が十分にあるところであるにもかかわらず、飲酒が許されている状況がある。また、大半のものは友人と一緒に飲酒をしているが、その次に多いのが家庭であることから、現在の若者の飲酒は、親や周囲の大人の未成年者飲酒への容認のもとに行われていると考えられる。さらに、クラブ活動やアルバイトなど、活動的で人との交流の場が多いものほど飲酒をしている可能性が高いことが認められたことから、現在では、若者の間にも、交際にあたってお酒が必要なものとなっていることが明らかになった。そのこと自体は容認せざるを得ないとはあるが、法律で未成年者の飲酒が禁止されている現状では、少なくとも高校生に対しては、親や周囲の大人は法律を順守させるべきではなかろうか。また、現在の未成年者飲酒禁止法⁹は、大正11年に施行され、昭和23年に改正されたものであり、必ずしも現状に則しているとはいえない。栄養状態の改善により身体的状況は当時とは著しく改善されており、飲酒禁止の年齢についての科学的根拠となるアルコールの身体への影響に関する再検討が必要なのではなかろうか。現在の大学生は、一人暮らしも増加し、別の面では大人扱いを受けることから、順守しやすい法律となるように禁止年齢が再考されることが望まれる。

また、今回の調査結果から、対象者は大人が考えている以上に大人の考え方に影響を受けていることが伺えることから、大人自身が法律を順守する姿勢を示すことが必要であろうと思われる。現行の学習指導要領および教科書でみる限りでは、アルコールに関する教育は充実してきているにもかかわらず、現実の高校生・大学生は、アルコールに関心があるもののアルコールに関する知識があるものは少なく、未成年者飲酒に対して「分からない」と回答し、判断できないものが多かった。このことは、社会問題ともなったイッキ飲みと無関係ではなく、1986～1995年の10年間で67人が急性アルコール中毒などで死亡したという現実¹⁰ともつながっていると考えられる。また、鈴木らにより実施された東京都および神奈川県の公立高校2校での実態調査から、アルコール依存症予備軍とみられる「問題飲酒群」が男子で24.8%、女子で14.1%いたことが明らかになった。また、「こうした危険な飲酒習慣のある高校生ほど、ピアスや茶髪、カラオケボックスなどといった流行を人より早く取り入れたいという気持ちが強」く、「ダイエットや過食なども飲酒習慣と深い関係が」あり、ピアス、茶髪などの割合も酒量に比例するということが明らかになったという¹¹。

おわりに

平成11年に公示された新しい学習指導要領では、教育における家庭・学校・地域における連携の必要性が強調されたが、若者のアルコール摂取教育に関してもこれらの連携なしには実効をあげることはできないと思われる。また、一方では、学校において生涯にわたって健康の自己管理ができるような、単なる理解にとどまらず、行動の変容につながる基礎的知識の習得をさせることが必要であると考えられる。今回の調査結果からは、未成年者のアルコール摂取に関して、保護者・教師の態度にも問題が感じられた。いわゆる生活行動としての飲酒に対しては、家庭においては両親をはじめとする大人が、また、学校では「保健」の担当教師だけでなく、担任の教師をはじめ、教育にかかわるすべてのものが、若者のアルコール摂取に関する認識を改める必要があるのではないかと思われる。

引用・参考文献

- 1) 文部省, 「中学校学習指導要領」大蔵省印刷局, 82 (1989)
- 2) 「新しい保健体育」東京書籍, 112~120 (1993)
- 3) 文部省, 「高等学校学習指導要領」大蔵省印刷局, 91 (1989)
- 4) 「高校保健体育」東京書籍, 58~59, 142~143 (1994)
- 5) 「家庭一般」東京書籍, 114 (1994)
- 6) 「家庭一般」東京書籍, 65 (1994)
- 7) 文部省, 「高等学校学習指導要領」大蔵省印刷局, 71 (1978)
- 8) “HBJ HEALTH, Level 1~8” Harcourt Brace Jovanivich, Inc. (1983)
- 9) 重森憲司, 小宮山徳太郎, 社団法人アルコール健康医学協会監修, 「お酒と健康-ABC辞典-」麒麟ビール株式会社, 40 (1996)
- 10) イッキ飲み連絡協議会協賛全国大学生生活協同組合連合会パンフレット (1996)
- 11) 姫野 忠, 東京新聞朝刊記事, 1996年9月8日